

GOD WITH US

Part 1: The Great Blessing
Genesis - Deuteronomy
February 28 & March 1, 2015

Message 3 – Abraham and Sarah: The calling of one family to bless the whole world

Genesis 12: 1 - 25:11

神は我らと共に

パート1：大きな祝福

創世記一申命記

第三メッセージ：アブラハムとサラ：一家族を用いて 全世界を祝福される使命

はじめに

アブラハムとサライの物語は、創世記の中で一番長い物語であると同時に重要な部分である。この物語は、イスラエルの民の基盤を形成し、神の全世界のためのご計画の内にある、イスラエルの民の重要な役割を説明する。前の章（創世記）で、世界中に散らばってしまった民族にとって、どのような希望があるのでしょうか？唯一の希望は、全ての人が歓迎される贖いの王国を神が築いて下さるといふ約束である。イスラエルの民は、神の恵みによって、罪と闇の中に失われてしまった世界に神の愛を仲介する、「司祭の王国」となる。アブラハムの使命は、神の裁きの下にあり、罪と反乱に満ちた世界への、神からの救いの贈り物である。

アブラハムの使命：12：1－9

物語は、神がアブラムと言う名の男に、（後に「アブラハム」と改名）故郷を離れ、新しい土地に移動することを命じられるところから始まる：

主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」。
（創世記12：1－3）

神とアブラムとの間で交わされた契約は、聖書全体の神学的基盤となる。神は、全世界の人々を祝福されたいと願っておられる。そして、そのご計画を、先ずイスラエルの民に、ご自分を現されることによって実行された。神とアブラムの契約は、具体的に、次の4つの約束である：1) 大いなる国民、2) 大いなる土地、3) 大いなる名、4) 国々への大いなる祝福。

あらゆる国の人々は、イスラエルの民の神を礼拝する生活に立ち会うことによって、神との個人的な交わりの内に入ることが歓迎された。ある意味、旧約聖書時代のイスラエルは、新約聖書時代の教会に似た役割であったと言える。丁度、今日、人々が教会（キリストの体）による証言や秘跡を通して、神を知る人が誕生するように、旧約聖書の時代の人々は、イスラエルの人々の生活の中で、証言と秘跡に繋がることによって、神を知ることが出来た。生まれながらのユダヤ人でなくても、「改宗」（転換）し、ユダヤ教信仰者となる事が出来た。アブラムは、75歳の時に故郷を離れ、カナン土地へと向かった。アブラムと妻、サライは、道中、甥のロトを始め、広い世帯の奴隷を構えていた。共に、カナン土地へと旅立ち、神は、偉大な土地に関する約束を改めて表明された。

主はアブラムに現れて言われた、「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」。アブラムは彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。彼はそこからベテルの東の山に移って天幕を張った。西にはベテル、東にはアイがあった。そこに彼は主のために祭壇を築いて、主の名を呼んだ。
（創世記12：7，8）

常に、人々を祝福されたいと願われているところが神の根本的な気質である。いつの時代も、人類に、罪からの赦しと神との関係を修復する方法を備えて来て下さった。また、人類には、神の優雅な救いの恵みに、神が規定された条件を満たすことによって、応答する責任があった。ヨハネの福音書には、神による規定と私たちに要されている応答の方法が明確に描写されている：「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世を裁くためではなく御子によって、この世が救われるためである。彼を信じる者は、裁かれない。信じない者は、すでに裁かれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。」（ヨハネの福音書3章16－18節）。

アブラムのエジプト滞在： 12：10-20

アブラムとサライ（後のサラ）の最初の主要な出来事は、飢饉のために一時的にエジプトに強制滞在したことであった。当時のアブラムには、人生の問題に直面した時に、神に信頼する姿勢が十分に発達していなかった。アブラムは、自分の身の安全のためにサライを犠牲にした。

エジプトにはいろいろとして、そこに近づいたとき、彼は妻サライに言った、「わたしはあなたが美しい女であることを知っています。それでエジプトびとがあなたを見る時、これは彼の妻であると言ってわたしを殺し、あなたを生かしておくでしょう。どうかあなたは、わたしの妹だと言ってください。そうすればわたしはあなたのおかげで無事であり、わたしの命はあなたによって助かるでしょう」。（創世記12：11-13）

恐れた通り、パロはサライの美しさのあまり、ハレムに連れて行った。監禁から逃れられる唯一の方法は、神の御手のみにあった。

ところで主はアブラムの妻サライのゆえに、激しい疫病をパロとその家に下された。（創世記12：17）

最終的に、パロはアブラムに妻を返すだけでなく、沢山の所有物までも返した。こうして、アブラムとサライは、偉大な神の御力によるパロに対する攻撃のお陰で、沢山の所有物を持ってエジプトから抜け出すことが出来た。この出来事に聞き覚えはないでしょうか？それは400年後、イスラエルの民に起こるエジプト脱出の予兆である。神はご自分に属する花嫁をエジプト監禁から解放されるために、パロの家を大きな災いをもって攻撃される。その大イベントであるエジプト脱出の際も、イスラエルの民は、同じ様に、沢山の所有物を持ってエジプトから脱出することになる。

神の救出のご計画は、昔々の族長とその妻によって予兆されていたことを知ったイスラエルの民は、どれ程勇気付けられたことでしょう！

神から目をそらし、物事を自力で解決しようとするとき、自分だけでなく、共に歩む者たちをも危険にさらすことになる。なぜなら、「神の保護の傘」の外に出てしまっているからである。常に神に目を向けることによって、あなたの一門を守りましょう！

アブラムとロトの別れ： 13：1-18

アブラムも甥のロトも、子孫においても所有物においても、神から恵まれていた。最終的に、群れが膨らみ過ぎたので、それぞれ分裂して行った。

アブラムは視覚によってではなく、信仰によって歩んでいたので、ロトに先に所有地を選ばせた。

アブラムはロトに言った、「わたしたちは身内の者です。わたしとあなたの間にも、わたしの牧者たちとあなたの牧者たちの間にも争いがないようにしましょう。全地はあなたの前にはありませんか。どうかわたしと別れてください。あなたが左に行けばわたしは右に行きます。あなたが右に行けばわたしは左に行きましょう」。ロトが目を上げてヨルダンの低地をあまねく見わたすと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったから、ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、すみずみまでよく潤っていた。そこでロトはヨルダンの低地をことごとく選びとって東に移った。こうして彼らは互に別れた。アブラムはカナンの地に住んだが、ロトは低地の町々に住み、天幕をソドムに移した。（創世記13：8-12）

ロトが移動した後（ソドムに向かって！）、神は、アブラムとその子孫に土地の最良の部分を与えて下さることを約束された。

ロトがアブラムに別れた後に、主はアブラムに言われた、「目をあげてあなたのいる所から北、南、東、西を見わたしなさい。すべてあなたが見わたす地は、永久にあなたとあなたの子孫に与えます。わたしはあなたの子孫を地のちりのように多くします。もし人が地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えられることができます。あなたは立って、その地をたてよこに行き巡りなさい。わたしはそれをあなたに与えます」。アブラムは天幕を移してヘブロンにあるマムレのテレビンの木のかたわらに住み、その所で主に祭壇を築いた。（創世記13：14-18）

どんな人間の推論やたくらみも、アブラムとその子孫との神の約束を果たすことから遠ざけるものは無かった。アブラムの役割は、ただ信仰によって神のご計画に沿って歩むのみであり、神の役割は、約束をお守りになることであった。

「人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある。」（箴言14：12）重要な決断を下す時、自分にとって何が最善かという自己判断基準に基いて決めがちである。ロトの方法がそうであった。一方アブラムは、謙虚に神を見上げ、神の導きと指導に頼る方法を選んだ。信仰に頼る道は、アブラムを約束の土地へと導き、視覚に頼る道は、ロトを問題に溢れる土地へと導いた。あなたは、どちらの方法で人生の道を決断しておられるでしょうか？

王の間での戦いとアブラムのロト救出： 14：1－24

創世記14章は、カナンの土地を争う国際戦争の勃発を描写している。戦争は、ソドムの町と親類のロトに大きな影響を及ぼした。この時点で、アブラムは、神、ヤハウエを信仰する男へと成長していた。ロトが捕虜となったと聞いて、アブラムは世帯からの318人という鍛えられた男たちで小さな軍を結集し、ロトを捕虜に捕えた王たちを追跡した。

そのしもべたちを分けて、夜かれらを攻め、これを撃ってダマスコの北、ホバまで彼らを追った。そして彼はすべての財産を取り返し、また身内の者ロトとその財産および女たちと民とを取り返した。

(創世記14：15, 16)

明らかに、神の力はアブラムとその一族の上にあった。神の助けによって最強の敵を倒した。特にこの物語は、手ごわい敵が待ち構えている約束の地に向かって進もうとしていた出エジプト世代にとっては、大きな励ましとなったに違いない。神のアブラムへの約束は、次の通りであった：

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」

(創世記12：3)。

この物語の最後で、アブラムは二人の王と対話をする。どちらの王も侵略者を倒し勝利へと導くために大きく貢献したアブラムを祝福することを望んだ。それに対するアブラムの対応が重要である。セーラムの王であり、いと高き神の司祭である、メルキゼデクがアブラムの上に祝福のために現れた：

彼はアブラムを祝福して言った、「願わくは天地の主なるいと高き神が、アブラムを祝福されるように。願わくはあなたの敵をあなたの手に移されたいと高き神があがめられるように」。アブラムは彼にすべての物の十分の一を贈った。(創世記14：19, 20)

それに対するアブラムの反応は、あらゆる神の祝福を認め、所有物の十分の一をメルキゼデクに、いと高き神への供え物として捧げた。対照的に、ソドムの王は、アブラムにあらゆる世俗的な物品を勝利を伴った礼として与えようとした。それに対するアブラムの反応は次の通りであった：

アブラムはソドムの王に言った、「天地の主なるいと高き神、主に手をあげて、わたしは誓います。わたしは糸一本でも、くつつひも一本でも、あなたのものは何にも受けません。アブラムを富ませたのはわたしだと、あなたが言わないように。(創世記14：22, 23)

アブラムは、人間のプライドの罠に落ちることはない。神によって祝福され、成功への道へと導かれている誉れを誰の手にも奪わせることを許さない。栄光が神にのみあるように！

ヘブル人への手紙の著者は、メルキゼデクについて深い重要性を示している(参照：ヘブル書5－7章)。この王-司祭は、初のキリストの面影を漂わせる重要人物であった。メルキゼデクは、どのような点でイエス・キリストの面影を形成していたのでしょうか？

－比類のない王であり、また祭司であった。イエスもそうであった。

－「義の王」であった。イエスは、義を与えて下さる「義の王」である。

－「平和の君」である。イエスは、父なる神との間に平和をもたらして下さる君である。

－アブラムから十分の一の供え物を受け取った。イエスは、生活全体の十分の一の供え物を受け取られる。

旧約聖書の多くの物語、人々、儀式、行事は、神がアブラハムの子孫を通して世界を祝福して下さるという約束の究極の実現となって下さるお方、キリストに目を向けてくれる。

自己依存精神は：「私がやりました。」「私の手柄です。」「私は相応しい。」「自分自身に依存します。」等と言います。一方、神に依存する人は：「神の御業です。」「神のお陰です。」「神の執事であることを光栄に思います。」「神に依存する関係の感謝の印として神にお返しします。」等と言います。アブラムは、聖書の中に登場する、十分の一献金を実行した、最初の人であった。新約聖書は、神が全ての所有者であることを認め、惜しみなく、お返しすることの実施を肯定している。私たちは、神の財産の管理人であり、神の資源を神の目的のために支配する執事である。

約束・契約の儀式的報酬： 15：1－21

この章は、神がアブラムに、なかなか子供を授けられないので、アブラムの心の中で、神と格闘するところから始まる。神の言葉によって、神にはアブラムの心の内を完全にお見通しであることが分かる。

これらの事の後、主の言葉が幻のうちにアブラムに臨んだ、「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであろう」。(創世記15：1)

アブラムは、即、まだ子供を授かっていない問題を定義した。アブラムではなく、広い世帯の誰かが、神がお約束された相続人になるということではないかと提案した。そして、神の応答は、明確かつ確固たるものであった。

この時、主の言葉が彼に臨んだ、「この者はあなたのあとつぎとなるべきではありません。あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです」。そして主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい」。また彼に言われた、「あなたの子孫はあのようなになるでしょう」。(創世記15:4, 5)

神は、アブラムと正式な契約の儀式を交わされた。その間、アブラムは深い眠りにつかされたことに注目しましょう。それは契約の達成が、ただ神の時にのみ依存し、アブラムの時に依存するものではないことを示している。実際、神のみが果たすことが可能である一方的な契約であった。

やがて日は入り、暗やみになった時、煙の立つかまど、炎の出るたいまつが、裂いたもの間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで言われた、「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。エジプトの川から、かの大川ユフラテまで。すなわちケニびと、ケニジびと、カドモニ人、ヘテ人、ペリジ人、レパイム人、アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の地を与える」。(創世記15:17-21)

ここに神の約束実現のタイミングについて、重要な新しい詳細が記されている。アブラムとサライは、実の息子を産み、その子を通して、偉大な王国が築かれる。しかし、その道のりは長く、神はまた、他国のためにも同様に継続のご計画を同時進行していかれる。

時に主はアブラムに言われた、「あなたはよく心にとめておきなさい。あなたの子孫は他の国に旅びととなって、その人々に仕え、その人々は彼らを四百年の間、悩ますでしょう。しかし、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの財産を携えて出て来るでしょう。あなたは安らかに先祖のもとに行きます。そして高齢に達して葬られるでしょう。四代目になって彼らはここに帰って来るでしょう。アモリびとの悪がまだ満ちないからです」。(15:13-16)

- 異国の地で400年間の弾圧が起こる(エジプト)。
- 神は、弾圧から勢いよく救出される(出エジプト)。
- アブラムは、長寿を全うし、安らかに死ぬ(更に175年生きた!)
- 4世代にわたり、アブラムの子孫がその土地を占有する。
- アモリ人(カナン人)の罪は、立ち退かせられるに至る水準に達していなかった。

神の方法は、大変複雑である。理解出来ないことが多いが、神は同時に多くの要因を扱っておられるということを知る必要がある。アブラムは、なぜ、私の子孫が約束の土地を受け継ぐまでに、更に400年もの間待たなくてはならないのかと疑問に思ったに違いない。それは、神がカナン人が、悔い改め、神に帰る猶予の400年と言う期間をお与えになったからである。アブラムには、神は約束をお守りにする忠実な神であることを学ぶ必要があった。また、神のご計画と目的は、アブラムの人生よりも、はるかに壮大であるということに信頼する必要があった。それは決して易しい教訓ではない。アブラムの様に、「神の働きを手助けしよう」という誘惑にかられることがある。しかし、自分の方法で神の働きを助けようとする時それは神の邪魔になるだけであり、結局、トラブルに終わる結果を招く!

アブラム、サライとエジプト人の女中、ハガル： 16:1-16

子供を授かるまでに10年待った後、アブラムとサライは、神のご計画の実現を助ける決心をした。サライが、エジプト人の女中、ハガルに自分の代理として、子供を産ませるという計画を提案した。この極めて重大な決断を下すにあたり、二人は、祈って神の御心を求めることに怠ってしまった。その計画は完璧のように思えた・・・子供が生まれるまでは。

彼はハガルの所にはいり、ハガルは子をはらんだ。彼女は自分のはらんだのを見て、女主人を見下げるようになった。そこでサライはアブラムに言った、「わたしが受けた害はあなたの責任です。わたしのつかえめをあなたのふところに与えたのに、彼女は自分のはらんだのを見て、わたしを見下げます。どうか、主があなたとわたしの間をおさばきになるように」。アブラムはサライに言った、「あなたのつかえめはあなたの手のうちにある。あなたの好きなように彼女にしなさい」。そしてサライが彼女を苦しめたので、彼女はサライの顔を避けて逃げた。

(創世記16:4-6)

ハガルの逃亡中、神が現れ、ハガルの息子から大いなる国民をお築きになられるご計画を約束された。憐み深いやり取りの中、神がハガルの息子に名前を与えて下さった。そして、ハガルも神にお名前を捧げた。

Ishmael (イシュマエル) = “God hears” = 「神は聞いて下さる」

利用されて、見捨てられた女の私の叫びを。

Elroi (エルロイ) = “God sees” = 「神は見て下さる」 私の状況を、

そして、神の愛を私まで拡げて下さる。

神に命じられた通り、ハガルはアブラムとサライの元に帰り服従した。この様にして、イシュマエルは、アブラムの家族として育った。後の展開はハガルとイシュマエルは、サライとその息子、イサクにとって継続的なライバルとなる。この相互の家族間の対立は、最終的には国際紛争へと発展する。イシュマエルの子孫は、イサクを通すアブラムの子孫において、永遠のとげとなる。

長い試練の内に置かれている時、神の愛に不信を抱き、自分は忘れられていて、私の問題をご存知であっても、気にしても留めて下さらないかのように思える時がある。ハガルの物語は、闇と疑いの真ただ中にある時も、神は状況を知って下さっており“God sees” (El-roi)、叫びを聞いて下さっている“God hears” (Isham-El)。決してご自分の子どもたちから目を離されることはないということを教えてくれている。

約束の更新・割礼；改名： 17：1－18：15

更に13年が経過したが、アブラムとサライには、まだ子供が授けられていなかった。神は、すっかり年老いたアブラムとサライに、約束された事柄を実現されるご意志を再確認されるために来られる。

アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。わたしはあなたと契約を結び、大いにあなたの子孫を増すであろう」。
(創世記17：1，2)

神の御心実行の更なる印として、アブラムとサライの名前を約束された将来を反映するものに改名された：

「わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう。あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、あなたの名はアブラムと呼ばれるであろう。わたしはあなたを多くの国民の父とするからである。(創世記17：4，5)

神はまたアブラムに言われた、「あなたの妻、サライは、もはや名をサライといわず、名をサラと言いなさい。わたしは彼女を祝福し、また彼女によって、あなたにひとりの男の子を授けよう。わたしは彼女を祝福し、彼女を国々の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王たちが出るであろう」。(創世記17：15，16)

「アブラム」とは、「群衆の父」と言う意味である。「サラ」とは、「王女」と言う意味である。神は、アブラムを大いなる国民の父とされ、王女のサラを通して、すべての国が祝福されることを明確にされた。

更にもう一つ重要な名前を二人にお与えになった。間もなく生まれようとしている息子に「イサク」(笑い)と名付けられた。なぜ、そのような名前が与えられたのでしょうか？来年アブラムは、息子を授かると聞いたとき、驚きのあまり(高齢のため)、イシュマエルを通して、そのご計画を実行されるよう提案した。アブラムは、不信のあまり思わず笑ってしまった！

アブラムはひれ伏して笑い、心の中で言った、「百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなって、どうして産むことができようか」。そしてアブラムは神に言った、「どうかイシュマエルがあなたの前に生きながらえますように」。(創世記17：17，18)

再び、次の章において、サラが懐妊するという神のご計画を聞いたとき、サラも笑ってしまった。神は、そのことについてサラを呼び出された！

さてアブラムとサラとは年がすすみ、老人となり、サラは女の月のものが、すでに止まっていた。それでサラは心の中で笑って言った、「わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみなどありえようか」。主はアブラムに言われた、「なぜサラは、わたしは老人であるのに、どうして子を産むことができようかと言って笑ったのか。主にとって不可能なことはありませんか。来年の春、定めの際に、わたしはあなたの所に帰ってきます。そのときサラには男の子が生れているでしょう」。サラは恐れたので、これを打ち消して言った、「わたしは笑いません」。主は言われた、「いや、あなたは笑いました」。(創世記18：11－15)

明らかに、二人には、神がこれから子供を授けて下さり、その子によって国家が築かれるという約束を果たされるご計画を信じる事が出来なかった。息子の「イサク」と言う名は、二人に、神の約束は奇跡的であり、驚くべきであることを永遠に思い出させるものであったが、決してふざけた冗談ではなかった。

創世記17：9－14では、神とアブラム(イスラエル)から生まれる国民との間の契約の永久の印として、全ての男の子孫に生まれて8日目に割礼を受けることをアブラムに命じられたことを記録している。この章の最期は、アブラムの世帯が、その指令に服従したことを記して締めくくられている(創世記17：23－27)。

創世記18：1－15では、アブラハムとセラの天幕に主が個人的に訪問されたことが記録されている。それはイサクが生まれる約一年前、17章と同じ時期に起こった出来事と思われる。

旧約の時代は、“Theophanies”「セオファニエス」（神の出現）が頻繁に記録されている。三位一体の二番目のお方、父なる神の御子が受肉以前の形で登場しておられた可能性が高い。この特定な例についてあげると、神はアブラハムとサラに二人のみ使いと共に現れた。アブラハムとサラは、ソドムとゴモラに対する神の裁きの実行のための訪問を中止させようとしている様に伺える（創世記18：16－19：38）。

神は、ご計画の実行を急いでおられない。アブラハムは初子の息子を授かるまでに25年間待った。モーセは、イスラエルの民を導く使命を受けるまでに、砂漠で40年間過ごした。ダビデは、十代の頃、油を注がれたが、実際、王になったのは30歳になってからであった。パウロは、主要な使徒として出現する前に14年間アラビアで過ごした。イエス様は、3年間の宣教活動のために、30年間かけて成長された。神は、あなたを通してなさろうとおられる事柄よりも、あなたの内でもなさろうとおられる事柄に、より関心を持っておられる。たとえ神の目的達成のご計画の実行が数年いや数十年遅れたとしても、忍耐深く仕える者たちを成長させようとして下さる！神は非常に忍耐強いお方である。

ソドムとゴモラに対する神の裁き： 18：16－19：38

アブラハムの物語のこの箇所には、二つの主な目的が秘められている：
1) 出エジプト世代がモーセの指揮下で、カナン之地へと向かうにあたっての警告である。その土地は、不義で満たされている。イスラエルの民はカナン人の不義に陥ってはならない。神の律法に従い、「司祭国家」、「聖なる国家」として、際立たなくてはならない（創世記19：5,6）。そうでなければ、ソドムとゴモラと同様に、神の裁きが彼らの上にも下される。
2) また、この箇所は、アブラハム一人を通して、神の祝福と保護が他へと広められる仲介者としての役割を強調している。

一仲裁者、アブラハム： 18：16－33

神がソドムとゴモラをお裁きになる意志を知ったとき、アブラハムは、そこに宿る残った義人のためにとりなした。以前ソドムに落ち着いた甥であるロトとその家族のことが頭にあったことは確実である。アブラハムは、神に質問した。「不義人と共にいる義人も裁かれますか？ もし、50人の義人がいたら？」「裁かない。」「もし、45人の義人がいたら？」「裁かな

い。」「もし、40人の義人がいたら？」「裁かない。」「もし、30人の義人がいたら？」「裁かない。」「もし、20人の義人がいたら？」「裁かない。」「もし、10人の義人がいたら？」「裁かない。」

要点は明確である。神が人類に裁きをもたらされる際、神は、絶対的に公正かつ正確である。神は人類の罪に対する裁きを執行されるとき、決して間違いを犯されることはない。次に続く場面の裁き実行の際、神は、アブラハムの質問より更に先を越され、4人を裁きから免じられた。

一ソドムとゴモラに対する裁き： 19：1－29

ロトをソドムから救出された後、神の道徳的から極端に外れてしまったことが原因で、神の裁きが、この町々と土地全体に下された。この物語には、ソドムの住民は冷酷であり、自己中心であり、あらゆる形で性的不道徳に夢中になっていたという事実を疑う余地はなかった。彼らは、2人の男性訪問者を強姦し、性的虐待行為を目的に手渡すことを要求しながら、ためらうことなく、ロトの家を攻撃した。ロトとその妻、そして2人の娘たちは、二人の男（御使い）によって速やかに、その町の外へと誘導された。ロトの妻は、「後ろを振り返ってはならない。」（19：17）という明確な命令に背いた。逃走中に、彼女は振り返ってしまった。本文の読み取り：「彼女は塩の柱になってしまった。」ロトの妻は、ソドムを（切望の思いで）振り返ってしまっただけでなく、引き返してしまい、その土地の町々の上に天から落ちてきた神の火の裁きに巻き込まれてしまった可能性がある。

一ロトの娘たち、近親相姦を犯す： 19：30－38

ロトとその娘たちとの関係は、機能が損なわれた家族の一例であった。以前ロトは、欲望に満ちた悪党らに、2人の男の訪問者の身代わりに、娘たちを提供することによって娘たちを辱めた。「好きなようにして下さい。」（19：8）。ソドムの破壊の後、娘たちは、父親と洞穴に隠れ住みながら、これから一体どうやって夫を探し、子を無むことが出来るだろうかと不安に思った（彼女たちの婚約者であった二人の男は、ソドムに残り破壊によって死んでしまった。）。二人にとって、不安の解決策は、神に信頼し委ねることではなく、父親を陥れ、酔わせ、性的関係を持つことであった。これらの近親相姦は何世紀も後、イスラエルの民にとっての永遠の敵国となるモアブ人とアモン人が約束の地の侵略を求める結果を招いた（19：37,38）。モーセは、出エジプト世代に、神の約束の内にある祝福の起源のみならず、何世紀も前にさかのぼり、信仰によって生きることが出来なくなった罪深い男たち、女たちの苦闘の起源も説明する。

モーセ五書における偉大な教訓の一つは、現在の私たちの行動は、将来の世代に影響を与えるということである。義の行いによる結果も、罪深い選択による結果も、今は目にすることはないかもしれないが、ほぼ確実に、神は父親の罪と父親の義さえも、第三世代、第四世代の子供たちへと受け継がされる（出エジプト34：6、7）。あなたは未来の世代の繁栄のためにどのような贈り物を用意しておられるでしょうか？神聖なる祝福の贈り物でしょうか？それとも神聖なる懲罰の贈り物でしょうか？

アブラハム、サラについてアビメレクに偽る： 20：1-18

アブラハムは、再び自分を守るために、罪深い戦略を用いて、妻であるサラのことを「妹」であると偽った。ゲラルの王、アビメレクは、当時十分に美しかったサラを自分のものにした。神は、その後アビメレクの世帯に裁きをもたらされた。サラがアビメレク、その妻、そして奴隷たちのものとなっていた間、栄えなくなってしまうので、最後にアブラハムは、彼らのために取り成した。ここでのいくつかの教訓：

- 1) アブラハムの信仰は、この段階においても、まだまだ進行形であった。
- 2) たとえ神の道の上を正しく歩けていない時でも、神の支えと保護は、アブラハムとサラの上にあった（15章での神とアブラハムとの間の契約は、一方的なものであったことを思い出しましょう。その契約はアブラハムの忠実さにかかっていたのではなく、唯一、神の忠実さに依存していた。）。
- 3) 再び、神の祝福は、アブラハムを仲介者として、他へと広められる、その役割が浮き彫りになっている。イスラエルの国民が、後にこの役割を受け継ぎ、神の祝福を世に広める仲介者となる。

イサクの誕生；ハガルとイシュマエルは追い出される： 21：1-34

ついに、アブラハム（100歳）とサラ（91歳）に息子が生まれる！喜び「笑い」（イサク）と名付けた。サラは、その名前由来を作り替えた：「神は私を笑われました。聞くものは皆私に向かって笑うでしょう。」（21：6）。実際神が彼らの子供に「イサク」と名付けるように仰ったとき、まったく違う理由があったことを思い出しましょう（参照：17：17、18：11-15）。

イサクの誕生は、サラとエジプト人の女中、ハガル（以前、アブラハムに息子を産んだ。参照：創世記16章）との間に更に緊迫した関係をもたらした。アブラハムにとっては、息子、イシュマエルを手放すということに「大

いに悩まされた」が、神は、イシュマエルを祝福されることをお約束され、ハガルとイシュマエルを追い出すことをお許しになられた（21：8-21）。実際、神は、ハガルの息子を祝福され、偉大な国家を築かれることを二度、約束して下さった（21：13、18）。確かに、イシュマエルの子孫は大いなる国々となり、その中の幾つかの国々は、何年後にイスラエルのライバルとなる。

アブラハム、イサクを犠牲にするように命じられる： 22：1-25

神がアブラハムに、その息子をいけにえとして祭壇に捧げることを求められたとき、アブラハムにとって信仰の歩みの定義の場が訪れた。それは、神への無条件の愛が試される機会であった（22：12）。アブラハムは速やかに正確に、神によって与えられた命令に従った。なぜ、アブラハムは、神が大いなる国民をお約束して下さった息子をいけにえにすることが出来たのでしょうか？新約聖書によるこの出来事についての説明から、アブラハムは、神には必要であるならイサクを死から蘇えらせることも出来るお方であることを信仰によって信じていたことを知ることが出来る。ヘブル人への手紙の著者は次のように説明している：

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。（ヘブル人への手紙11：17-19）

最後の瞬間に、神がイサクの代わりに供え物（近くの茂みからまった雄羊）を備えて下さった。この神聖なる贈り物を褒め称え、アブラハムは、神とその山に“Yahweh-jireh”「神は備えて下さる」と名付けた。

神は、無条件の愛を求めておられる。神は、私たちの人生の優先順位において、2番目、3番目、4番目ではなく、最優先でありたいと願っておられる。時おり、私たちにとって最も尊いものに手を置かれ、心をお試しになられる。その時、本当に求めておられることが何であるかを感じしなくてはならない：私たちの心の完全な献身である。神が心を試される時、私たちのイサクを祭壇に捧げなければならない。何らかの方法で、神は、私たちの心に真の必要を備えて下さり、私たちの行く手となって下さる。

アブラハムとイサクのこの場面は、イエス・キリストの別の気質とイメージを教えている。神は、イサクの身代わりとなる捧げものを備えて下さった。イエス様こそが、身代わりに死んで下さり、捧げものとして神が備えて下さった雄羊である。アブラハムとイサクと共に“YAHWEH-JIREH!” 「神は備えて下さる！」と喜び叫んでよいのです。神が私たちをお救いになるために必要な捧げものを備えて下さったのですから。

サラの死と埋葬： 23：1－20

サラは127年生きて、カナンで死んだ。この章の目的は、ただ死と埋葬を記録するだけでなく、むしろ、アブラハムが定めた埋葬の過程を記録することにある。アブラハムは、古い慣習に従い、サラを先祖の土地に埋葬するのではなく、カナンに埋葬するための土地を購入した。この時点まで、その土地に所有物はなく、仮の住まいであった。しかし、サラの死をきっかけに、ヘテの息子に属する土地を購入した。

こうしてマムレの前のマクペラにあるエフロンの畑は、畑も、その中のほら穴も、畑の中およびその周囲の境にあるすべての木も皆、ヘテの人々の前、すなわちその町の門にはいるすべての人々の前で、アブラハムの所有と決まった。その後、アブラハムはその妻サラをカナンに地にあるマムレ、すなわちヘブロン前のマクペラの畑のほら穴に葬った。このように畑とそこにあるほら穴とはヘテの人々によってアブラハムの所有の墓地と定められた。（創世記23：17－20）

この日、アブラハムは、神がイスラエルの民に約束されていた偉大な土地の最初の割り振りを与えられた。

イサクの妻探し： 24：1－67

24章は、アブラハムが息子、イサクのめに妻を探し求める過程を詳細に記している。アブラハムは、イサクがカナン人を妻に娶らないように導くことによって信仰を行使した。アブラハムは、一族から息子の妻を見つけるために、僕を故郷に送り返す決心をした。アブラハムは、その僕に、二度命じた：「何があっても、息子のイサクをあ土地に連れて行ってはならない！」イサクは、神が約束して下さっているカナン地の相続人である。私たちの故郷のウル地に、イサクが戻ることは決してあってはならない。その僕は、アブラハムの親戚が住んでいるメソポタミアへと戻る長い旅に出た。神はその僕を、アブラハムの兄弟ナホルの孫娘リベカへと導かれた。僕

は、アブラハムの親族に主が主人を大いに祝福されたことを語った。彼らは、リベカの結婚において、神の御手による働きを感じし、イサクの妻、そして、神の約束の相続人となるために、リベカを送り出した。その僕とリベカがイサクの待つところに到着した時、その場面は、それはロマンチックな色調へと展開し、二人の最初の出会いを記録している。紛れもない、一目ぼれであった！

イサクは夕暮、野に出て歩いていたが、目をあげて、らくだの来るのを見た。リベカは目をあげてイサクを見、らくだからおりて、しもべに言った、「わたしたちに向かって、野を歩いて来るあの人はだれでしょう」。しもべは言った、「あれはわたしの主人です」。するとリベカは、被衣で身をおおった。しもべは自分がしたことすべてをイサクに話した。イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとって妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た。（創世記24：63－67）

物語は、神がアブラハムとサラに約束された相続人である、イサクとリベカの人生へと継続していくために、舞台の設定が整った。

アブラハムの死： 25：1－11

アブラハムには、沢山の息子と娘がいたが、皆、約束の地にイサクだけを残すために送り出されてしまった。唯一イサクの種にのみ、神の約束の満ちしがあった。

アブラハムは、175歳で死に、ヘテの息子から購入した土地、妻リベカの隣に葬られた。その人生では、神の祝福がすべての国民に行きわたるための基盤が築かれた。

旧約聖書が指す「アブラハムの子どもたち」とは、イスラエルの民のことである。新約聖書の「アブラハムの子どもたち」の概念は、アブラハムの信仰を分かち合うすべての人（ユダヤ人も異邦人も）へと広がった。パウロは、ガラテヤ人の教会に宛てて手紙を書く：だから、信仰による者こそアブラハムの子であることを知るべきである。聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを、あらかじめ知って、アブラハムに「あなたによって、すべての国民は祝福されるであろう」との良い知らせを、予告したのである。このように、信仰による者は、信仰の人アブラハムと共に祝福を受けるのである。（ガラテヤ人への手紙3：7－9）もし、あなたが、身代わりの捧げものとなって下さった救い主、イエス・キリストに信仰をおかれるなら、その時、この一人の男を介して、すべての国民を祝福される神の約束を喜ぶ真のアブラハムの子供となる。